

北神塾 第二講「国家の物語 ―なぜ政治を志したのか―」②

平成26年6月20日

北神 圭朗

- 我が国の最大の課題は何か。
 - ▷ 内に向けては、財政事情、医療・年金・介護、人口問題、
外に向けては、中国、北朝鮮からの挑戦、
自分の生活だけではなく、国民全体、国家のために貢献していただく、あるいは、我慢
をしていただく局面が多くなる。

- 「国家の物語」とは何か。
 - ▷ 自分たちの国と国民が、これまでどのような思いと志をもって、国を支えてきたかとい
う「物語」。

- 「国家の物語」がなぜ必要なのか。
 - ▷ これからの課題を乗り越えるために、我が国の「物語」に共鳴して、自分たちもその
思いと志を「引き継ぎたい」と思うことが大事。

- 「国家の物語」の内容。
 - ▷ 「我が国は、どんなに強大な国にも屈服せずに、独立の気概で対等なつきあいをして
きた。」
 - ▷ 「これは、聖徳太子の隋帝国に対する外交方針により、あざやかに宣言された我が国
の国是である。さらに、明治以降は、自分たちの国だけではなく、世界構想として、
「どんな国であろうと差別なく共存共栄すべきだ」という国際社会を求めてきた。先
の大戦で悲劇的な敗戦を喫したものの、その廃墟からふたたび立ち上がって、現在も
その志を追求している途上にある。」
 - ▷ また、この物語の中で、日本は強大な国からの挑戦に立ち向かうためには、平時は平
等な社会を好みつつも、いざ国家危機の際には、強力な指導力を発揮して、乗り越え
てきた。

歴史的にみれば、

- 1) 古代は、朝鮮半島における覇権国家（高句麗等）に対して、大和政権が少しずつ地
方の豪族を束ねて、統一国家を築いていく。

- 2) 隋の勃興に対し、朝鮮半島の国々とは異なり、聖徳太子により「日出る国の天子」として対等な外交関係を確立する。
- 3) 唐の勃興に対し、「白村江の戦い」での敗戦に危機感を募らせ、聖徳太子の内政上の改革を引き継ぎ、「大化の改新」で権力集中を図る。この求心的な改革は、律令国家によって完成される。
- 4) 平安時代に入り、東アジアの緊張がゆるみ、摂関政治などの遠心力が働き、鎌倉政権の樹立によって、さらに分権的な国家となる。
- 5) 蒙古の襲来に対し、一步も独立を譲らない北条時宗は、この危機に対し、求心力を働かせ、鎌倉幕府の権力を強化・拡大する。一方、朝廷も「神国日本」の実現のために、後醍醐天皇が「建武の中興」を図るが、室町幕府にとってかわる。
- 6) この間、明帝国の比較的平和な外交方針もあり、また、足利義満の「国家の物語」への無知からくる朝貢外交もあり、国内は遠心力が働き、最後は無政府状態に陥り、戦国時代が訪れる。
- 7) 天下取りの争いの中で、スペイン・ポルトガルのキリスト教を利用した植民地主義に対して、秀吉の（中国とインドまで及ぶ）世界構想が生まれ、これを実現するための二回にわたる朝鮮征伐が行なわれる。
- 8) 徳川家康が最後は天下を取り、幕府は管理外交を実行するとともに、国内からキリスト教の脅威を根こそぎ取り除くことにより、国家の自主独立を保つ。
- 9) 徳川時代の天下泰平の中で、政治運営の遠心力が働くものの、後半にはロシアをはじめ、西欧列強、極めつけはアメリカからの挑戦を受けて、公武合体など権力一元化への求心的な動きが活発化し、明治維新が起こる。
- 10) 明治政府は、御誓文の下、強力な中央集権国家を実現したものの、中央権力の中身としては、きわめて分権的な制度を設けてしまう（明治憲法）。当初は、元勳元老が強力な指導力を発揮し、日露戦争に勝利をするという、西欧中心の世界史の流れを根本的に転換する偉大なる事業を実現する。
- 11) また、第一次世界大戦後のパリ講和会議においては、「人種平等主義」を世界史上はじめて外交の場で宣言する。挫折に終わるが、その精神は我が国が維新以来、直面してきた差別的な外交（三国干渉等）に対抗する理念であり、また、共存共栄の世界構想への芽生えでもあった。
- 12) 元勳元老がいなくなる中、中央権力が分散分裂し、軍部の独走等を許す。我が国は戦略なく、あるいは、戦略を実行する統制力なく、満州事変、国連脱退、支那事変等に突入し、これらにより、米国との戦争に追い込まれる。
- 13) 戦後は、昭和天皇が御誓文を再確認され、吉田茂などの戦前派が「国家の物語」を継承しようとするものの、他方で、「国家」に対する反感などが広く浸透してしま

う。マッカーサーの下で、吉田茂は求心的な指導力を発揮し、様々な国内改革を実行する。

1 4) 「冷戦」が激化する中、岸信介は、安保改定、軍事力増強など、「国家」の復権を図るとともに、保守合同や小選挙区の導入による派閥解消といった求心力ある政治を実現する。

1 5) 「冷戦」も次第に米ソの二極体制という安定的な国際秩序になり、我が国は「国家の物語」を忘却し、経済成長や福利厚生に政治に走る。

- 今、国民に芽生えつつある国家意識の傾向は肯定すべきことではあるが、情緒論に終わらせず、1) 「国家の物語」を共有することにより、健全な愛国心を養うとともに、2) 戦略をつくり、これを統制的に実行するための強力な権力集中を図らなければいけない。

以 上